

13. Hubbit株式会社 話せる伝言板「ケアビー」

Hubbit株式会社 話せる伝言板「ケアビー」

<p>機器・サービスの概要</p>	<p>本製品「ケアビー」は、ビデオ通話機能を軸に、高齢者と支援者間の円滑な連携を実現する高齢者用タブレット端末です。</p>
<p>機器・サービスの機能</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● スマートフォンの操作が不自由な独居高齢者が日常生活を送るうえで、以前は家族との定期的・気軽なコミュニケーションに困っていましたが、本製品のボタンひとつでつながるテレビ通話機能によって、離れた家族の顔を見ながらいつでも安心して会話ができるようになります。
<p>情報アクセシビリティの配慮内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 本製品は、高齢者側の認知機能の衰えや視力の低下によって操作が困難にならないように、ビデオ通話の着信に際しての応答操作が不要な設計を徹底しています。 ● また、ご家族から高齢者へ送る文字によるリマインド機能やメッセージ機能に使用するフォントやボタンも大きなもので構成し、かつ、高齢者側からは最低限の操作で返答できるように設計を行いました。 ● さらに、聴力の低下した高齢者への配慮として、ビデオ通話の画面下部に大きな文字で字幕を出すことのできる機能を搭載しました。
<p>問合せ先</p>	<p>ケアビー問い合わせ窓口 【電話】050-3138-3535 【HP】 https://services.carebee.io/#Contact</p>

話せる伝言板

ケアビー



利用者平均 **83** 歳

認知症 **111b** 方も利用



大画面で見やすい

A4サイズ相当の大きな画面で高齢者にも見やすく安心



操作ほぼ不要

置いておくだけで自動でつながる簡単設計



自動字幕機能

音声自動で字幕表示耳が聞こえにくい方も安心



事業所連携

医療・介護事業所とオンライン連携予定リマインドも可能

Hubbit株式会社 話せる伝言板「ケアビー」

当事者ニーズを踏まえた開発

【現場密着型のヒアリングと観察】

- 本製品の開発チームは、高齢者施設や当事者の自宅といった実際の生活・ケア現場に赴き、日々の生活動作、介助の様子、コミュニケーションの方法などを直接検証し、問題点の洗い出しを実行しました。また、当事者や介護・支援スタッフへの詳細なインタビューを通じて、言語化されていない潜在的な困りごとや心の負担を丁寧に拾い上げました。

【実証実験に基づく、再現性の高い価値体験】

- 文京区在住の後期高齢者13名を含む、平均87歳の高齢者35名(男性17名、女性18名)を対象に実証実験を行いました。ビデオ通話機能で会話した際の利用者の表情について、映像解析による感情解析を実施したところ、利用の継続によって、幸福感情が高い状態で安定していることが証明されました。私たちは、上記の実証を基に、当事者の幸福度の向上、そして介護側が本当に必要とする機能を追求して開発を進めました。

企業としての組織的な取組

- 弊社では現在「ケアビー」の開発と改善に力を入れており、利用者の方の「使いやすさ」を何より大切に作る体制を社員全員で作ってきました。

【ケアビーの開発で守っていること】

- 私たちは、ケアビーをデザインする上で守っている大切な「考え方」を持っています。これは、高齢の方の認知、視力、聴力、運動能力の変化に合わせて、「操作のしやすさ」や「見え方」をどうすべきか、という細かな配慮の集まりになります。この考え方を社員全員で共有することで、高いレベルで安心できる製品を作ることが可能となりました。

【専門チームと利用者からのフィードバック】

- 製品がちゃんと使いやすい状態にあるかを確認するため、品質を確かめる部署と連携した専門チームを設けています。このチームは、実際にケアビーを使われる方の視点に立って、操作のしやすさなどを厳しくチェックするものです。
- また、介護施設や利用者の方々からいただく「生の声」は、私たちが最も大切に作る財産です。この貴重な声は、ケアビーをより良くするための新しい機能や改善にまっすぐ繋がる仕組みになっています。

審査結果の概要



高齢者の操作負担を最小限に抑えた直感的なインターフェース

- 受信操作不要の自動接続や、高齢者のタブレット操作を最小限にした使いやすいインターフェースにより、認知・身体機能が低下した高齢者でも受動的に利用可能である点が評価された。
- 自動音声認識を使った字幕機能、文字拡大機能など、高齢者の感覚機能低下に配慮されている点が評価された。



介護現場に密着した当事者ニーズの徹底的な反映

- 開発者が介護施設に3ヶ月間住み込み、多数の高齢者のモニターを通して、潜在課題の発掘やニーズの把握、機能の試行と改善を行っている点が評価された。
- 実証実験を通じて現場の声を反映し、使いやすさを徹底追求している点が評価された。



「使いやすさ」を最優先する組織的な取り組み

- 専門チームが利用者視点で厳格な品質検証を行う体制を構築している点が評価された。
- サポーター養成講座を受講するなど、開発に関わる社員が対象者への理解を深め、組織的にアクセシビリティ向上に取り組んでいる点が評価された。